

2022/5/8

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑦

『ヨハネの黙示録第1章』

■ ヨハネの黙示録の背景

ヨハネの黙示録は、60年代のネロ皇帝の迫害の時期か、81年～96年のドミティアヌス帝の迫害の時期に書かれたと言われています。

この書は、終わりの日に至る経緯（肉体の死に至って天国に行くまでの経緯）が、異なる側面から書かれており、時間の流れに沿って書かれているわけではありません。それは、肉体の死に至る過程が人によってさまざまだからです。事故で亡くなる方もいれば、病気や戦争で亡くなる方もいます。一様には説明できないので、様々な方向から書かれているわけです。しかし、いずれの場合でも、肉体の死が訪れたならば、最終的にはキリストの勝利があるのです。

■ すべての人に起こること

「イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。」（黙示 1:1）

黙示というのは象徴です。この形態は、現代ではあまりなじみがなく、意味をとらえにくいのですが、当時の人達にはなじみのあるわかりやすい形態でした。肉体の死という、時代を超えてすべての人に共通する内容であるからこそ、イエス様は黙示を使って説明しておられるのです。

「すぐに起こるはずのこと」とは、誰もが迎える死のことです。個人の死というものは、いつ訪れるかわかりません。一般にイメージされているような地球の滅亡のことを指すのであれば、「すぐに起こるはずのこと」とは言いません。

ここで重要なことは、それを「しもべたちに示すため」、すなわち、クリスチャンに対する励ましとして示されたということです。

「ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかした。この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。」

(黙示 1:2-3)

「時が近づいている」とは、二つの意味があります。一つは、ローマ帝国の大規模な迫害のことです。もう一つは、人は生まれた時からそれぞれ死に向かって歩んでいることの象徴です。

「ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、後に来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、1:5 また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、1:6 また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。」(黙示 1:4-6)

「七」は聖書では「完全」を象徴する数字です。たとえば、神が世界を創造するのは七日間です。そこで、「七つの教会」とは、教会を通して神の働きの完成が成し遂げられることを象徴的に表しています。

「今いまし、昔いまし、後に来られる方」とは、父なる神様のことですが、三位一体の神としてとらえても間違いではありません。また、「七つの御霊」とは、御霊の働きは完全であることを表しています。さらに、イエス・キリストは、罪人である私たちをそのまま受け入れ、十字架によって罪から解き放ってくださいました。罪というと私たちは行為を想像しますが、そもそも、罪とは神と分離された状態、すなわち死のことです。罪の行為は、罪（神との分離）から生まれるのです。罪から解き放たれるとは、神は私たちと再結合してくださったということです。こうして、私たち自身が神の国となり、私自身が神の神殿となり、その中に御霊が住まわれるようになりました。これが「神の国が来た」ということなのです。

祭司とは、神殿に仕える者です。これは、誰もが神と直接交わるようになったということです。人はこれまで神について具体的にはわかりませんでした。イエス・キリストを知って、イエス様に仕え、御言葉を聞き、祈ることができるようになって、私たちは今、神の国の中に入れられている状態になりました。これが、永遠のいのちを頂いているということです。ですから、あとは肉体の死と同時に復活して、天に挙げられるのを待つだけなのです。

「見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。」(黙示 1:7)

「雲に乗ってこられる」とは、私たちが天に引き上げられることの象徴です。ここまでが、これから話されることの概略です。ここからさらにこれまでの内容が詳しく語られます。

■ 勝利者である主

「神である主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」(黙示 1:8)

私たちは神の国の中に入れられて祭司となりました。あとは天に引き上げられるだけです。これが「永遠のいのちを持つ」ということ、つまり、「イエス・キリストを持つ」ということです。そして、私たちが持っているイエス・キリストは、「アルファでありオメガである」つまり、「始まりであり終わりである」ということです。

人は、時間の流れの中で生きています。人が不安を抱える原因、それは、「今」が定まらないからです。私たちが「今」と言ったその瞬間に「今」は動き、過去に侵食され、そして未来を侵食します。「今」が動き続けるということは、過去も未来も定まらないということです。「未来」は「過去」にどんどん侵食され、過去も未来も曖昧です。過去が曖昧なため、人は過去を悔やみ、未来が曖昧なため、不安を抱きます。これが不安の原因です。「今」がなく、「過去」も「未来」もないから不安なのです。つまり、私たちの不安を取り除くためには、不動の「今」をしっかりと持つ必要があります。それがイエス・キリストです。

イエス・キリストを持つと、「今」が確定しますから、「過去」と「未来」が確定します。どう確定するのでしょうか。イエス・キリストは、はっきりと「あなたの過去は赦された」と言われました。私たちが悔やんできた過去は、「赦された」という過去に確定します。そして、私たちが恐れてきた未来は、「あなたはよみがえる」という未来に確定しました。イエス・キリストは十字架で復活し、それを見せてくださったのです。こうして私たちの過去と未来は確定しました。これが「アルファであり、オメガである」の意味です。

今見ているものが「今」ではなく、イエス・キリストが「今」です。イエス・キリストだけが唯一変わらない存在です。それが「今」であり、「永遠」です。イエス・キリストにつかまった者は、「今」を手にし、過去も未来も確定するのです。そして、万物の支配者であり、すべてのものを持っておられるイエス・キリストを持つということは、すべてのものを持ったということです。

「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。」(黙示 1:9)

パトモスとは、迫害を受けていたヨハネがかつて滞在していた島です。「御国と忍耐にあずかる」とは、神の国を持ち、それを信じる忍耐にもあずかっているということです。永遠のいのちを頂いていることを信じることを、忍耐という言葉で表しているのです。聖書は、約束のものを手に入れるのに必要なものは忍耐だと教え、神は私たちの忍耐を試すとも語っています。それは、迫害にあっているクリスチャンに対して、あなたは神の国にいるから大丈夫だ、それを信じ続けなさいと励まし続けているということです。

「私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」(黙示 1:10-11)

「主の日」とは、イエス・キリストが三日目によみがえった日のことです。クリスチャンは、その日を記念して日曜日に礼拝をするようになりました。つまり、「主の日」とは、日曜日の礼拝を示唆しており、日曜日の礼拝は特別な時だと言っているのです。この七つの教会は、ほとんどが小アジア（今のトルコ）にある小さな教会です。大きな教会ではなく、小さな教会を示すことで、神の言葉は教会を通して語られるということを象徴しているのです。礼拝とは神の言葉をしっかりと聞く日であって、神の言葉を伝え、イエス・キリストを証しする場所が教会なのです。

「そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。」(黙示 1:12-16)

燭台は、モーセの時代の政治を指します。また、人の子とはイエス・キリストのことです。このようにして、教会は世の光が照る場所であることを象徴的に教えているのです。世の光とは、イエス・キリストです。白い頭と髪は神の正義を表し、足は神の正義が闇を打ち砕くことの象徴です。七つの星は教会の象徴であり、イエス・キリストは教会を通して語られることが表されています。

イエス・キリストが来られることを象徴的に預言しているのが、イザヤ 53 章です。そこに描かれているのは、ほふられた羊としての弱々しい姿であって、とても勝利者のようではありません。しかし、ここではイエス・キリストは完全に勝利者です。イエス・キリストは、私たちの苦しみを背負うために、私たちの弱さを担い、人と同じ姿になりました。しかし、私たちが神の国に入れられた今は、もう勝利を見るときになったのです。私たちにとって肉体の死は、勝利を見るときです。その勝利をもたらす、あなたを天に引き上げるのはイエス・キリストです。ですら、本当に力強く栄光に満ちた姿で描かれているのです。

■ 最大の患難と完全な希望

イエス・キリストは教会を通して語り、私たちに勝利をもたらしてください。ところが、この御言葉こそ、私たちの最大の患難になるのです。なぜなら、神の言葉は、あなたを機関銃のように責めたてるからです。あなたは神の言葉を信じるのか、自分の罪をどうするのかと責められて、希望が与えられるどころか、誰もが自分の罪に絶望し、神の前に頭を垂れて死んだようになります。しかし、これが希望の始まりです。

「それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。」(黙示 1:17-18)

ヨハネは神の言葉を聞いた時、死んだようになってしまいました。それは、神の正義の前では、自分は罪深い人間でどうすることもできないことを悟った現れです。私たちも同様に、神の御言葉によって、自分は本当に不信仰なものでどうすることもできないと失望するしかなくなり、頭を垂れて死んだ者のようになります。その時、人は、「神様、私を助けてください！」と叫ぶことしかできません。

すると、神は「恐れるな。」と言われたのです。キリストの言葉の前で、罪人としてなすすべのない私たちに、神は「恐れるな」と語り、「あなたの過去は、すべて雪のように白くなった。」と語っておられます。「あなたの罪はすべて赦されたから、自分の罪を見て裁かれるこ

とを心配しなくてよい。あなたは、私と一緒に生きる者となった。だから恐れるな。」と語っておられるのです。

イエス・キリストは、私たちの罪を背負い、確かに死にましたが、生きる者となりました。その姿によって、あなたも生きる者になったのだから、大丈夫だと励ましておられます。私たちには終わりの日が来ますが、何も心配することはありません。イエス様は、「私は初めてあり終わりである。」「あなたの過去は赦され、将来は確定した。」「私は生きる者だから心配はいらない。」と、ヨハネの黙示録は、一貫して励ましているのです。

「そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。」

(黙示 1:19-20)

黙示録 1 章は、黙示録全体の概略です。黙示録は励ましの書です。私たちにとっての試練は常に御言葉です。御言葉は私たちに神を信頼しなさいと迫り、私たちの罪を明らかにします。しかし、恐れることはありません。神はあなたの罪を赦していますから、罪が明らかにされると同時に赦しを受け取ればよいのです。あなたは私に愛されている良きものであると神は語っておられます。神はあなたを初めから良きものとして造られました。これが神の一貫した福音であり、この福音を受け取ることで人は癒されるのです。